

キム・チュイ著
『ヴィという少女』
関未玲訳、彩流社、2021年

Kim Thúy, *Vi*, Libre Expression, 2016

スティーブ・コルベイユ
Steve CORBEIL

キム・チュイの処女作『小川』（原作：*Ru*）は2009年にフランス語で出版され、その後英語をはじめ、ドイツ語やスウェーデン語など29言語に翻訳され、本稿の執筆時点では世界で52万部も売れている。さらに、有名な俳優が出演する映画がまもなく公開されることで再び注目を集めるだろう。欧米ではキム・チュイは文学のロックスターさながらの存在である。プロの批評家から喝采を浴びるだけではなく、一般読者の間でも大絶賛されている。愛読者が多いキム・チュイは世界中を旅しながら、ベトナム戦争、ボートピープルとしての難民生活、ケベック州の移民としての体験談を語り、独特な「散文詩」の文体で書いた小説を朗読する。また、ベトナム料理や自閉症の息子の育て方について著述した書籍もある。ケベック州ではテレビのパーソナリティや新聞のコラムニストとしても活躍し、ファン層の幅が広い。ヨーロッパでは、開催されるキム・チュイによる講演会のチケットがすぐに売り切れる。一方、自作を紹介するために、3回も来日したにもかかわらず、一部の研究者とカナダに興味がある読者を除き、日本人にはあまり知られていない。キム・チュイの作品の受け入れ方は、欧米と日本では大きく異なっている。この現象をどのように理解すればよいかをまず考察したい。そして、2021年9月に出版された関未玲訳による『ヴィという少女』（原作：*Vi*）は日本人の読者がキム・チュイに持つ印象を変えることができるのかを重要なポイントとして分析することをこの書評の目的とする。

ケベック州で『小川』が出版された時期、外国にルーツを持つ作家によって書かれた「移動文学」というジャンルは読者に求められた時代と一致している。ケベック州は1960年代から少子化の危機があり、一つの対処方法として徐々に移民受け入れの方針を策定した。当初、移民として流入したニューカマーと共存したが、文化交流は比較的少なかった。特に、非白人でフラン

ス語を母語としない人の声はあまりメディアに届かなかった。ケベック州の総人口にしめる割合の割には、メディアにおける移民などの表象が過小であったと認めざるを得ない。しかし、1980年以降になると、多彩な視点からケベック社会が様々な媒体で描写され、移民の小説家、詩人、歌手、俳優、監督などケベック州の文化に実績を残した。テーマとしては、故郷への郷愁、ケベック社会との乖離、移民の苦勞が一般的であった。それにたいして、キム・チュイの作品は自分と家族の悩みを暗いこととして扱わず、必ず明るい展開をもっていった。特に、チュイの小説に描かれているケベック人が移民に対して示す態度は特徴的である。差別が皆無であり、寛大な性格で、新参者であるベトナム難民が新しい社会に溶け込む日々を優しく支えるケベック人ばかりが登場する。また、『小川』には赤十字、NGO、カナダ政府、ケベック人に対する感謝の気持ちが溢れている。当然ながら、ケベック州をはじめ、移民・難民を前向きに受け入れた欧米社会へのラヴレターとして読めば、文体のオリジナリティを除いても『小川』が流行した秘訣に迫ることができる。

一方、社会状況が大きく相違する日本で同じ作品が成功しなかった理由は明確である。日本の移民・難民政策には欧米諸国と比肩するものはない。多くの日本人にとって移民・難民は他人事であるといっても過言ではない。最近のウクライナ人難民への対応で、認識の変化がみられる人もいるが、長期的に続くと思わない。ケベック州の人々と異なり、日本人は長年他者である異文化の人と絆を紡ぐ環境に生きていない。近年変わりつつあるとはいえ、根本的に日本社会の共同体は多様性ではなく均質性を土台にして形成されている。

しかし、チュイの受容事情は社会構造だけでは説明できない。出版業界と読者の先入観も重要な関わりを持つ。日本は翻訳王国と言われているが、最近では翻訳対象とされる作品は実は限定されている。英語の原作であり、ミステリーや児童文学など一部の作品が優先されている。ベトナム出身でケベック州の作家がフランス語で書いた純文学の小説を書店が置かないことは言うまでもない。

では、関未玲訳による『ヴィという少女』は日本社会における受容のあり方を変える力があるのか。フランス文学とケベック文学の研究者である一方、多くのフランス語教材も作成してきた関未玲は、言語の錯綜を意識し、日仏文化間の架け橋として現在最も活躍している一人である。『ヴィという少女』では、原作の内容と文体が再現されていても、読書体験を忘れず、日本人読

者も好む文章に訳されている。つまり、読みやすさだけを優先させることなく、正確性を大切にすることにも妥協はなかった。読者はチュイの声を日本語で聞いているように感じるといえる。翻訳論の専門用語で言い換えれば、関未玲は「同化翻訳」（日本語・日本文化に合わせる翻訳）と「異化翻訳」（原作の言語と文化を表す翻訳）は紙一重であることを理解し、バランスよく両スタンスを効果的に使用している。

翻訳の完成度が高いことは誰も否定できないが、『ヴィという少女』が日本人読者を魅了するのが次の課題となる。キム・チュイの小説はオートフィクションというジャンルに属する。オートフィクションとは、作家の実体験とフィクションの場面を混合するジャンルである。作品における実体験とフィクションの描写を読者は区別できない。このプロセスによって、作品は説得力を高め、文学ならではの比喩力や普遍性も利点として使える。ある種の私小説と解釈してもよい。オートフィクションの歴史は短く、フランス人の小説家で批評家でもあるセルジュ・ドゥブロフスキーによる造語として1977年に初めて用いられた。つまり、日本の私小説より新しい文学視点であるが、ドゥブロフスキーがその言葉を使用してから、オートフィクションがフランスとフランス語圏の文学で爆発的に流行した。フランス文学ではマルグリット・デュラスの『愛人 ラマン』（原題：*L'Amant*, 1984年）とアニー・エルノーの『ある女』（原題：*Une femme*, 1993年）、ケベック文学ではネリー・アルカンの *Putain*（2001年、邦訳未刊）が最も有名である。ケベック文学研究者レジヌ・ロバンはオートフィクションを *Le Golem de l'écriture. De l'autofiction au cybersoi*（1997年、邦訳未刊）で分析している。

キム・チュイの『小川』も『ヴィという少女』も作家自身の体験と家族や他のベトナム人の話に基づいている。両作の構成は似ており、どちらもベトナム人女性が一人称の語り手である。両作の主人公である女性は、戦争で失った大富豪の家族生活、戦争中の社会変化、徴兵の運命から兄弟を守るための亡命、マレーシアの難民キャンプ、ケベック州で経験するカルチャーショック、貧困から抜け出す勤勉な家族の努力について語る。『ヴィという少女』の特徴といえば、男女のコミュニケーション問題が最後まで強調されていることである。さらに、語り手が、怒りや軽蔑の感情を表現せず、周辺の男の弱さを客観的に描写している点にも特徴がある。信頼できない男と人生をともにしてしまった結果、女の強みとめげない心が芽生えるテーマが目立つ。例えば、家族と一緒に逃げたくないヴィの父は、母と兄弟を失望させる。それ

にもかかわらず、母はシングルマザーとして知らない国で子供を育てる。ヴィと兄弟は仕事で成功しているが、西洋化したヴィは母と家族から少し離れる。特に、ベトナム人の若い男性と恋愛関係が発覚した時に、母に「あなたの教育を失敗してしまった。私は、自分の失敗作の顔を見に来たのよ」(p.99)と言われる場面が印象的である。その後、母と娘の関係がある程度復活する。ヴィはベトナムのルーツとケベック州の文化が共存する生活を目指す。しかし、弁護士として地位を築き働いていても、友達が多くても、自分と家族を見捨てた父に対する恨みが消えない。

ヴィは仕事をきっかけにベトナムに戻り、数ヶ月後、フランス大使館で生態学兼鳥類学者のヴァンサンに出会い、恋に落ちる。小説はマルグリット・デュラスの『愛人 ラマン』風に変化していく。最初は、ヴァンサンはヴィの理想の男性に見えるが、彼は仕事のため、徐々に長い出張が増え、最終的に音信不通になる。娘は母と同じ運命に直面する。しかし、この事実を母に伝えたくない。「私はハーとジャサントに、ヴァンサンの存在と失踪を母には知らせないよう頼み込んだ。娘が自分と同じ運命、同じ物語、同じ見捨てられ方をしたと知ったら、母は打ちのめされてしまうことだろう」(p.150)。小説の終幕になってもヴァンサンとの再会は果たせないが、一方では自分の父がまだ生きており、恐怖心というよりも、プライドのため家族と一緒に逃げなかったと聞いた。父は一人で逃げようとしたが失敗した。ヴィは近くにいる父に会いに行くかどうかをずっと迷う。結末は最終的に読者の判断に任されている。

「訳者あとがき」で、関未玲はヴィとヴァンサンとの関係を説明したうえで、デュラスの『愛人 ラマン』と比較し、「いっぽうデュラスを敬愛する二十一世紀の作家キム・チュイが描く祖国は、グローバル社会のなかで人生の偶然により改めて出会い、経験を更新してゆく場所となる。二人の女性作家は、まったく異なる形で、ベトナムを舞台とした恋愛小説を描いたことになるだろう」と論じる (p.161)。さらに、このグローバル社会のコンテキストで書かれた小説はヴァンサンと同じように時空を超える誘いとしても解釈できる。「生態学兼鳥類学者であるヴィの恋人ヴァンサンが愛する鳥たちのごとく、読者もまた断章とともに自由に国境を越え、時空を超える旅へと誘われる。(中略) グローバル社会である二十一世紀においては、この時空的な距離感の喪失こそが、共有され得る体験となるのかもしれない」(p.160)。そして、あとがきはこのグローバル社会においてキム・チュイの文学の重要性を

証明する。この「訳者あとがき」を読むためだけでも、この本を手にとる価値がある。関未玲は『ヴィという少女』を分析するだけでなく、この小説とケベック文学と社会を結びつけるヒントも紹介する。このヒントがあれば、確かに日本の読者はさらに本書を楽しめるだろう。それだけでなく、「訳者あとがき」ではデュラスとの関係や普遍的なテーマがあることによって、世界文学としても読めることも明らかにしている。

今後、日本でキム・チュイのブームが起きるか否かは予想しがたい。恐らく、この小説の宣伝のされ方と移民・難民問題にどのように日本人が向き合うか次第である。しかし、間違いなく、この翻訳は日本におけるキム・チュイとケベック州の理解に大きく貢献している。

(スティーブ コルベイユ 聖心女子大学)